
銀河の歴史は何ページだったっけ？（仮）

ぽてと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀河の歴史は何ページだったけ？（仮）

【Nコード】

N1530V

【作者名】

ぼてと

【あらすじ】

一般の成人女性が、銀河英雄伝説の登場人物に転生するお話です。一応戦争ありの原作なので、保険で残酷描写ありにします。愚図でノロマな亀更新です。あしからず。

*この小説は、『らいとすたっふ2004ルール』に基づいて作成しています。

はじまり

私、シャルロット・フィリス・キャゼルヌ。

…いや、マジで。

コスプレとか、ごっこ遊びとかじゃないよ、マジでだよ？

アレックス・キャゼルヌの長女で、父親から7歳年上のユリアン・ミンツの事を

「お前の未来の旦那だぞ」

と刷り込まれるいたいけな少女がこの私、シャルロット・フィリス・キャゼルヌですよ。

私も自分が精神的におかしくなりすぎたんじゃないかとか、質のよすぎる夢を見てるんじゃないかと思って色々と試してみたんだけど、どうやら夢じゃないらしい。

シャルロットになって1週間、寝て起きても日本の自宅に戻るわけでもなく、転んだり頭を強く打ち付けたり（怒られた。オルタンスさんとキャゼルヌ先輩にめっちゃ怒られた。）しての衝撃で目が覚めるわけでもなく、どうやらマジでシャルロット・フィリス・キャゼルヌになってしまったらしい。

そろそろ現実を受け入れなきゃと思い始めてきました。

日本では両親兄妹健在で、家族仲もごく普通の、ホントに一般的な家庭で育ってきた。

確かに、寂しいし、会いたいし、だからこそこの1週間いろんな方法を試して帰ろうと努力してきたわけですが。

もう成人で働いてたからねえ、私。

ひとり暮らしも始めてたから、実際は毎日家族に会ってたわけでもないし、毎日電話で生存確認していたわけでもないし、要するに血のつながった家族といえどそれほど密に繋がっていたわけでもなかったのだ、近頃は。

ちよつと連絡もなかなかできない海外の僻地に仕事で飛ばされて会える事が出来なくなったと思いこめばこの孤独感にも耐えられるかもしれない、よしそうしよう。そう在ろう。

日本のお父さん、お母さん、先立つ不孝をお許してください。

あなたたちの娘は星になりました、いやマジで。

だつてここイゼルローンだし。

シャルロット、いま8歳。パパのお仕事の関係でイゼルローンで暮らしています。

「シャルロット〜!!ちよつと手伝つてちょうだい」

「はぁ〜い、ママ!」

うん、子供返りするの悪くないかな。

パパとママに思いつきり甘えて、可愛いシャルロットになりきつてやるんだから!!

「お兄ちゃま、がんばってね」

「うん、シャルロット、行ってきます」

ユリアンお兄ちゃまが走って艦橋に向かっていく。

私はそれを、ニコニコと手を振って見送るのが今一番重要なお仕事だ。

まあもちろん、勉強するとかママのお手伝いするとか、他にも大切な事はあるんだけど、やっぱり自分の命を守ってくれてる人たちに感謝するのって重要な事だと思うの。

やー、それにしても。

私、ユリアンお兄ちゃまとかカリンお姉ちゃまとか、軍人に転生しなくてマジ助かったわ。

とりあえず戦わなくていいもんね。

よくある転生ものの小説のように、『頭の中で自分が知る筈のない記憶が甦ってきた』的な事も、『考える前に体が動く』なんて経験も、チートな能力も今のところない。

シャルロットは8歳だから、それなりにできない事もなんとなく許されるけど、軍人スキルなんて全くなかった私が、他の人に転生しちゃったらすぐ死んじやうと思うのよね。モブの軍人だったら自分だけで済むけど、ヤンおじちゃまとかに転生しちゃってたら何千人かと心中することになってどれだけ恨まれるかわからない。

今の私、俗に言う記憶喪失者です…今のところ大っぴらにはれてないんだけど。

別に私が上手く立ちまわれたとかいうわけじゃなくて、8歳という

『小さなコドモ』であるという周囲の認識と、転居続きの『家庭の事情』が目くらましになっただけ。

小さい子にいちいち「アレなんだっけー？」とか「コレどうしたっけー？」とか記憶の確認なんてしないじゃんね？

だから意外とどうにかなってる。

子供って飽きっぽくて、好物とか、ハマってる事とかも結構頻繁に入れ替わったりする事もあるじゃない？だからシャルロットの好きなものの傾向なんて全然わからないけど、「今の興味はちよつと前と違うのかも」程度に捉えられてるっぽい。

あと、多分シャルロットってハインセン どのかの僻地な惑星 イゼルローン この時8歳なはずで、この世代の子供が触っていい物も限られてて、どちらかというと今から覚えてくことが多い世代っていうのになんか助けられてるんだよね。

まだイゼルローンに来て間もなかったからか、家電操作を覚えてなくても「まだ覚えてないのね」とか親切に教えてくれちゃったりする。

「ママー、何か変なとこ触っちゃったみたいなの」

とかなんとか言っちゃって、現在積極的に覚えている最中です。

交友関係的には、ママとパパが覚えてるくらい仲のいい友達ができなかったってのがラッキーだった。

もし仲のいい友達がいたら申し訳ないけど、交友関係は今から作っていいこう、そうしよう。

今はアルバムをみて、たまに不審がられない程度に

「ママー、この子誰だっけー？」

と聞いて知識を得たり、

ハインセンとかどっかの僻地から友達だったと思われる子たちが送

つてくれるビデオレターチックなモノを見たりして記憶の確認をしたりしてます。

ま、一応はOVAで見る外見からの想像で、『ちよつと少女趣味でちよつとお転婆、何故何ぼうやなお年頃』（ナニソレ）設定を作つて猫かぶつてはいるんだけど、ストレスにならない程度ですんでるし。

とはいえ、一度はちよつと危なかったりもした。

前にみんなでTV見てる時、ママが

「シャルロット、ほらそろそろ時間じゃない？あなたの好きなあの番組に変えなさいな」

とか言いだしちゃつて。パパも

「ああ、シャルロットはあの番組が好きだからなあ。今日は何が出るんだろうな？」

とか、日本のチャネル権渡さないオヤジどもに見せてやりたいマイホームパパ的な事を言い出したんだけど。

（好きだった番組つて何……！？）

欠片も想像できない私は大慌てでさ。

アニメなのか、ドラマなのか、全く想像がつかない。

そもそもOVAとか小説でもシャルロットがTVを見ている場面なんてなかった気がする。

ヤバイ、TV番組ごときで記憶喪失がばれるのか……！？

でも。

「私たち、かえたげるー」

と、妹が一言言ってくれたおかげで助かった。

「…あ、あつ、チャンネルかえてくれるの？ありがとう！！」
と、慌てて妹にチャンネルを渡す私。

「あら、偉いわねえ。お姉ちゃんのお手伝い？」

「偉いなあ、どれ、ちゃんとできるかな」

と、パパに手伝ってもらってチャンネルを変えている妹は、どこか誇らしげだ。

「できた〜」

「ありがとう！！とっても嬉しい！！」

妹が変えた私の好きな番組は、戦記物のアニメだった…どんな趣味だよシャルロット…。

ちなみに。

「妹」と言い続けている妹は、小説の時も最後まで名前と年齢が出てこなかった可哀想な子なんだけど、私がシャルロットになってから数週間、

今まで一度も名前と年齢の話になった事ありません！！

ビックリするー。

てか、本当に設定に忠実な世界なんだなあと思った瞬間でした…。

パパとママは苦も無く名前も年齢も言わないで過ごせてるけど、私はちょっと厳しいのよね。

一緒に遊んでる時とか絶対に名前を言わないってどんな無茶振りかと思う。

そのうち、出てくるのかなあ…名前。

とりあえず墓穴掘りたくないの。今は名前を呼ばない努力を惜しんでないけど、いずれあだ名でもつけちゃおう。

なんて、色々あるけど、やっぱり転生先がシャルロットで良かったなあ、としみじみ思う一番の理由は。

シャルロットには、死亡フラグがないの！！

ここ重要。

とりあえず限りなくモブに近い脇キャラだったためか、どんな行動をとるとか細かい行動は殆ど書かれてない気もするけど、要するにママにくつついとけばほぼバッドエンドにはならない、のは魅力的。

私の銀河英雄伝説の知識って、OVA>小説で、大筋の流れは覚えてるけど戦況とかの細かい流れが言えるほどのマニアックな読み方なんてしてないし、軍人の誰かとかになったりなんかしちゃったら、話の流れは最悪な方向に流れていくに違いないと思うんだよねえ。

まあ、それってせっかく転生したんだから、死んじやう予定の人を助けようとか、そういう大それた『ファンとしての夢の世界』を実行に移すのも難しい位置にいるキャラだって事なんだけど…そこらへん、難しいわね。

ユリアンお兄ちゃまの年齢から逆算していくと、多分物語として書かれている最期らへんって私まだ12歳くらい…？

マジで何の権利もないガキじゃん。

え、私にどうしろって言っの？

転生した意味、ある??

「ユリアンお兄ちゃま、あっちで遊びましょう」

「こっちきて」

ヤンおじちゃま達が夕ご飯を食べにくる日は、ユリアンお兄ちゃまと眠くなるまで遊んでいい事になっている。

てか、週2で来るって多すぎない？下手したら週3の時もあるんですけど。

でもそれはパパにも後ろめたい所があるからみたいなんだよね。

そもそもナンチャラ法（既に名前を覚えてない）でユリアンお兄ちゃまがヤンおじちゃまに引き取られたのだって本当の事を言えばおかしいのだ。

普通は子供のできない夫婦か、子供が独り立ちした夫婦に引き取られるもの、らしいから。

でもパパが、「俺だって色々考えて」ユリアンお兄ちゃまをヤンおじちゃまの所に預ける事にしちゃった。

ので、ヤンおじちゃま達の衣食住が破綻するのはパパにとっては寝覚めが悪いらしい。

ママも

「あなたが蒔いた種なんだから、最期まで自分で責任を持たなくてはね」

と、いつものようにパパをやり込めつつも、せつせとユリアンお兄ちゃまに色んな家事を教え込んでいる。

週2で家に来るのは別に夕飯たかるだけじゃなくて、料理やお掃除

をママに教わりに来てるつてのもあるんだよね。

で、お礼に私達の子守りをする、と。

じゃあ遠慮なく相手をしてもらおうじゃないの。

…つつつてもちよつとインドア派に見えるシャルロットと、絶対に付いてくる妹がいれば、遊びなんてたかが知れてるんだけどさ。因みに今日は『お絵かき』です。

「シャルロット達は、何を書いているの？」

「えっと、パパと、ママと、わたしと、妹と、ユリアンお兄ちゃん！」

「私たち、げんすいー」

妹が言う「げんすい」とはヤンおじちゃま達の飼っているデブ猫のこと。今は暖炉の前にいるけど、名前を呼ばれたので尻尾と耳だけ少し動かしただけ。

…あまりにも動かないから太ったに違いない。

「………なんでそこに私はいないんだ？」

「シャルロットが描いたのが『家族』だからだろう。ユリアンはいずれ、シャルロットの夫になるわけだから、立派な『家族』だ」

「私はユリアンの保護者ですよ、ユリアンが家族なら私も立派に『家族』じゃないですか」

「8歳時にはそこまでわからんだろう」

「……………」

ヤンおじちゃまとパパは不毛な会話をしているけど、

もちろん私も狙って描いてます。

「……僕は何を書こうかな……」
今さらヤンおじちゃまは描けないらしい。…ま、余計な気遣いは逆に悲しくなるだけだよね。わかります。

と、横から妹が

「あのねー、おひめさまがいい!!」
とおねだりしてきた。

「ユリアンお兄ちゃま、お姫さま描いて？私も書いてみる。…ね、みんなで描こう？」

ママも、妹も、と二人にもクレヨンを渡すと、妹は「おひめさまー」と嬉しそうにグリグリと描きだし、ママは「お姫様は女の子の憧れですものね」と言いつつ描き始めてくれた。

ふふふ、ココで2人の『お姫様』像を確認してこの世界の『お姫様』像をリサーチしてやろう。

「じゃあ僕もお姫様描いてみようかな…」

ユリアンお兄ちゃまも描きだしたので、私も同時に描き始める。

「…できたー!!」

結果。

妹……カラフルなマルに手足と思われるものがくっついていた。

ママ……無難に帝国貴族のお嬢様みたいな感じだった。

ユリアンお兄ちゃま……意外。画才がない。全然ない。人の形はしてたけど、服の形は良くわからない。

そして私。

「シャルロット…この人はどんなお姫様なの？」

「この間図書館でかりたご本のお姫様なの、ママ。とってもきれいなドレスを着ていたの」

「シャルロット、どんな本だったんだい？僕こんなドレス見たことなかったよ」

「えつとね、『かぐやひめ』って言うの。ひめだし、お姫さまでしよう？」

とってもキレイなドレスだったの、と言えばみんな『へー』と不思議そうに私の絵を見た。

『かぐやひめ』は実際に図書室に置いてあったので、なんの問題もないと思う。

ま、見つけた時はビックリしたけどね。さすがにボロボロで1冊しかないし人気のない本だから大人たちは見た事がなかったんだろう。

「ああ、この服は見た事があるよ。確か西暦時代の地球の極東地域のどこかの民族衣装だったと思うんだが…。どこだったっけな？」

「お前、よく知ってるな」

「いや、『かぐやひめ』は知りませんが戦史を調べていた時の資料の挿絵に載っていたのを覚えていたんですよ。重ね着しすぎて重そうだってね」

情緒がないよ、ヤンおじちゃま。

でもこれで、「日本」も「十二単」も一般には全然知られてないのは良くわかった。

同盟も大したことないなあ、くたばれカイザーなくせに憧れのお姫様は帝国のお嬢様なんだから。

どうせなら対極した何かを浸透させればよかったのに。

なんて、実は私もユリアンお兄ちゃま達が来た時にこっちの常識を色々と学んだりするので都合が良かったりする。

「ユリアンお兄ちゃま、今度は何を描くの？」

イゼルローンで暮らし始めてしばらく経った。

暮らし始めて分かったことは、やっぱり常に戦争中なだけあって、それほど治安は良くないってこと。

私は8歳なわけだけど、まだ一人でお使いに行ったことはないし、買い物に行った先でも一人で待たされるってことはない。

常にママと一緒にいたり、ユリアンお兄ちゃんがいったりするの。

でも、この日はちょっと違った。

「じゃあシェーンコップさん、申し訳ありませんけどお願いいたします…。シャルロット、シェーンコップさんの言うことをよく聞いて、いい子でいるのよ…。妹のことでもよろしくね。」

「ママ…」

「お任せください、キャゼルヌ夫人。なァーに、少しくらい、私にだって子守できますよ」

……………ママ……………???

なぜにシェーンコップなのか。

それはママが主婦であり女だから。

イゼルローン商店街に新しくオープンしたお店でオープン記念バーゲンをやっているのを発見したママが、

偶然出会ったデートの真っ最中なのにバーゲンに参戦したくてうずうずしていたシェーンコップの恋人と意気投合して、

私とシェーンコップを置いてバーゲンに突っ込んで行ってしまったのだ。

因みにシェーンコップの恋人はとくにバーゲン会場に突っ込んでいったけど、ママはきちんと私と妹とシェーンコップが喫茶店でチョコレートパフェ2つととコーヒーを注文したのを見届けてから出かけて行った。

さすがママ。

シェーンコップの不良中年っぷりをよくわかってるのね！！

喫茶店のマスターとも一応知り合いなので、保険をかけているんだろう。

それにしても、デートの途中にバーゲンに突っ込む恋人って一体…。ま、早々に振られるでしょうね、どっちかが。

なんて、無責任で下世話なことを思いつつ、ちみちみチョコレートパフェを食べ進める私。

たまに食べこぼしそうになる妹の面倒も見たりして、なんていいお姉ちゃんなんだろうと自画自賛してみる。

てかさ。

正直8歳児がローゼンリッターの隊長さんと話せる話題なんてない

わけで。

気まずいのよねえ。

とか考えているとタイミングよくシェーンコップがのほうから

「お嬢ちゃん」

と声をかけてきた。

「なあに？」

ちよつと小さい声で答える。一応世間知らずのお嬢ちゃまなはずなので、人見知りちつくな演出だ。

「お嬢ちゃんはいくつだ？」

「…8歳なの。シェーンコップおじちゃまは？」

ここで注目。私は普段、オルタンスのことをママ、キャゼル又先輩をパパ、ユリアンをユリアンお兄ちゃま、ヤン提督はヤンおじちゃまと既に脳内で変換済みだけど、まだ呼び方が決まっていないう人については脳内で呼ぶとき基本小説を読んでいたころの呼び名で呼んでいる。

一応私の中で決まりがあつて、出会って呼び方が決まったら、脳内でもその呼び名に変換して呼び方を統一するようにしているの。ぼろが出ると困るし。

で、シャルロット基準でいくとシェーンコップは『おじちゃま』でいいはずんだけど…

「少なくとも、お嬢ちゃんにおじちゃまと呼ばれるほど年ではない

なあ」

と、やけにキツパリ拒絶をされた。

ま、予想の範囲内ですけど。いつも不思議なんだけど、同盟の男性陣って年を取ることにごく抵抗があるのはなんでかな？

私わりと年上のほうが好みなだけだなあ。男は30からっていうじゃない？

「どうして？おじちゃまじゃダメなの？」

「おじちゃまなんて、いかにも年をくったジジイに対する呼び方だろう？何も悪いことをしていないのに、なんでおじちゃまなんて呼ばれなきゃいけないんだ」

おお、どこかで誰かが言うようなセリフだな！！
ちよつと感動。

でもシャルロットにはシャルロットなりの理由があるので、こちらもちよつと反撃に出てみる。

「でもパパが、ヤンおじちゃまより年が上な人は、全部おじちゃまつて呼びなさいって」

シェーンコップおじちゃまは、ヤンおじちゃまより年が下だった？と無邪気に一発。

因みにこの基準で行くと『お兄ちゃま』の権利があるのはユリアンお兄ちゃまのほか、ポプランやコーネフとか辺りだ。アッテンボローらへんがギリギリかな？

シェーンコップもちよつと言葉に詰まったみたいだけど、気を取り直したのか

「俺は確かにヤン提督よりも年は上だが、あの人よりも体も心も若さを保っているつもりでね。お嬢ちゃんにおじちゃんなんて呼ばれると、余計に年をくいそうでいけない。せめて「シェーンコップさん」程度にしてくれるかな？」

と、きつちり要求してきた。

ふむ。

まあ、本人の意思に沿ってあげてもいいかなって思わなくもないんだけど、私さつきから一っだけ気になってることがあるのよねえ。

「……………シャルロットだって『お嬢ちゃん』じゃないもん」

「うん？」

「シャルロットだって『シャルロット』だもん、『お嬢ちゃん』なんて呼ばれるお子様じゃないもん。おじちゃまはシャルロットのこと、ずっと『お嬢ちゃん』だったから、シャルロットもおじちゃまのこと、ずっと『シェーンコップおじちゃま』なの！」

ねー、と妹に同意を求めると、妹もクリームのいっぱいついた口でニタアと笑いながら「シェーンコップおじちゃま」と呼んだ。

相手に名乗るときはまず自分から。

なら、相手に呼んでもらいたいときはまず自分から、でしょ？
最初っからずっと気にくわなかったのよ。

そのあと。

シェーンコップおじちゃまは「なるほど」と笑い、それからしばらく『お嬢ちゃん』と言わない努力を開始したけど、二言目くらいにはすぐぼろが出てしまったため、へそを曲げた（ふりをした）私からずーっと『シェーンコップおじちゃま』と呼ばれ続けるようになるのは、

まだ誰も知らない未来の話。

今日、パパが『俺不機嫌です。ものごつつ納得いきません』顔をしたらアッテンボローを連れてきた。

「まあ、落ち着け」

飯でも食ってろ欠食児童と、失礼な事を言いながらとりあえずご飯をすすめてる。

「……………」

でもアッテンボローも言いつけどおり黙って食べているあたりが可愛いわよね。

あ、お気づきでしょうか私アッテンボロー鼻屑でした転生前。

20も後半なのに言動が若々しく後輩チックなのがなんともたまら

ん。

ま、別にラブじゃないけどライクだけど。

…さすがに年齢差20はちょっとだいぶ好きになんないとラブにはなりにくいよね。

まあ帝国の誰かさんは20歳以上の年の差の壁を乗り越えて結婚してるからありっちゃありなのか？

転生前成人過ぎてた身としては、同年代を恋愛対象にするのは気が引けるというかそもそも眼中にはいらなない。てか、周囲に同世代も少ないし。

かといってあんまり年が離れすぎても先立たれるのが早すぎるのはちょっと悲しいしねえ。

今は毎日を乗り切る事で精一杯だから別にいいけど、ちょっと恋愛

モード入った時に年の差は私の中で大問題になりそうだなあ。

なんて、くだらない事考えながらブーツとアッテンボローの方を見ていたら。

「どうしたシャルロット、俺の顔になんかついてるのかい？」

アッテンボローと目が合いました。

まさか「あなたとの恋愛関係成立はありかなしか考えてました」なんて本音を言えるはずがない。

パパ泣いちゃうかもしれないし。

無難に

「アッテンボローお兄ちゃま、怖い顔してるからどうしてかしらって思ってたの」

と答えてみた。

「ほらみるアッテンボロー、お前さんが景気の悪い顔してるからウチの娘が怯えてるじゃないか」

さっさと顔を治せ（どう治すんだろう、整形？）と半分本気っぽくいうパパに、アッテンボローお兄ちゃまはキツとキバをむいた後、

「違うんだシャルロット、君のせいじゃないよ」

と、何が違うか分からないけどとりあえず釈明らしき説明を始めた。

「今日ね、くだらない番組名をタオルやら歯ブラシに印刷した有名な人がいたんだ。でさ、俺に『恵まれない人たちにこれを配って宣伝して来い』って言うんだぜ？」

「アッテンボローお兄ちゃまに？」

「そう。俺はね、シャルロット、軍人であって、営業マンじゃないんだ。その番組の事も大嫌いだし、俺の仕事じゃない事を、俺の上

司でもないのに当然のように命令する有名人なんて大嫌いなんだ。
…だから、ちよつとイタズラしてやったのさ」

「イタズラ？どんなイタズラ？」

「配れって言われたタオルとか歯ブラシを、『番組を見る事も出来ない辺境に行く恵まれない人たち』に配ってやったのさ！多分あいつらは『番組を見る事のできる恵まれない人たち』に配ってやれって言っただんたろうけど、そこまで詳しく命令されなかったから、裏をかいてやったんだよ」

どうだ凄いだろう、と胸を張るアッテンボローお兄ちゃんに、

「恵まれない人たち、喜んでくれるといいね」

と返しつつ、私は自分の少ない銀英伝知識の中から一つのイベントを引っ張り出すことに成功した。

捕虜交換式。

そうか、アレが近いのか…

「喜んでくれたよ。でもな、君のパパやヤン先輩は、俺の事怒ったんだぜ？酷いと思わないかい？」

「パパ、お兄ちゃんのこと叱ったの？」

「シャルロット、いつかお前にも『本音と建前の使い分け』が分かる時が来る。アッテンボロー、お前シャルロットと同レベルでどうするんだ、本音と建前くらい使い分ける！」

「使い分けてます！でも、今回は必要ないと思ったんです！」

「それが青いって言われるんだお前は！」

「俺はまだ20代だから、若くても青くてもしょうがないんです！」

パパもアッテンボローお兄ちゃまも、だいぶお酒がすすんでいるのでなんか言っている事が支離滅裂になりつつある。

こういう時、「子供らしさ」を大切にするママは、子供が酔っ払いに近づいている事をあまり良くは思っていないので、私はそつと退散した。

「ママ、もう寝るね。おやすみなさい」

「はい、おやすみなさいシャルロット。良い夢が見られるといいわね」

ベッドにもぐりながらなんとなく考えるのは、さっき仕入れた「捕虜交換式」が近いという情報の事。

私、あのイベント好きなんだよね。

近くで見るとは、どうしたらいいのかな…

さて、ココで残念な報告です。
実は私、頭が悪い。
というか、成績が悪い。

まあ色々と言いつかせていただくと、一番の原因はやっぱりシャルロットの記憶が殆ど残っていなかった、という点だろう。

あ、ちょっと残ってた事が判明しました。
盲点だったんだけどね、私文字が読めたの！

やゝ意外だったわ。

とりあえずイゼルローンにも小規模ながら小学校（エレメンタリスクールと呼ばれている。アメリカ文化？）があつて、シャルロットもそこにきちんと通っていたので、

（やばい、文字が読めなかったらどうしよう…）

とか思っていたわけなんだけど、教科書は普通に読めた。

そついや言葉もわかったしね！

どうやら一応最低限のコミュニケーション能力は付けていてくれたらしい（誰がだ）

しかし、『最低限』という単語に注目！

シャルロットが習ってないと思われる単語の綴りとかはマジでわからないので、普通に覚えるしかありません。

「英語だったら習ったことあるんじゃないの？」と甘く見ない方がいい、ココはもう地球のことなんてポイッと捨ててしまったほどの

未来の世界だから、言語も微妙に違っていて、下手に昔の知識がある方がわけがわからない事も多い。

ので、勉強ガチ勝負となると、明らかに分が悪いんだなあ、これが同盟公用語 同級生と同レベル。

帝国公用語 8歳までの記憶がないため、2年間学んできた初歩の課程がさっぱわからず、底辺。

数学 さすがに目覚ましい発展があったとしてもこの世代が学ぶところなんてそう変わらないので優等生。

理科 根っこの部分は同じ。だか化学はともかく科学は発展しすぎてお手上げ。

社会 地球の2000年までの歴史しか知らない私にとっては既に未知の世界。

……ふふふ。20年以上の人生を歩んできた記憶のあるこの私が、8歳児に余裕で勝てる教科が数学しかないという現実。

しかも数学ってどっちかと言えば苦手教科なので、今はともかく長い目で見て、いずれ追いこされていくに違いないと思う。

っていうか、元々文系だったので何か間違いが起きてても理系にだけは進みたくない。

でもこの成績じゃ、何か将来に不安を感じるなあ。

私、将来何をしたらいいんだろう……

という素朴な悩みを抱えていたわけですが、ある日図書室に行った時に気づいた事があったのよね。

私、日本語読めるし、書けるじゃん……！！

思えばコレって凄くない？

今はもう使われてないかもしれない言葉を自在に操れる私。…あ、何かカッコいい。

地球の文化、特に極東の小さな島国の日本の文化なんて、有名な事はともかくそんなに残ってないとも思うのよね。

そういうの掘り起こして発表するだけでも、職業として立派に成立しないかな。

と、ちよつと調べてみたら「民俗学」とか「考古学」って単語が引っ掛かってきた。

民俗学かあ…

ま、地球の極東地域の民族、特に日本人を研究しています、とか言うのも悪くないかもねえ。

食いつばぐれないかも…。

そんな打算から、私の将来の夢は「民俗学の研究者」になった。

とりあえず今はその片鱗を覗かしかないとね！

そんなわけなので、成績が悪いのは仕方がないから、過去は振り返らず今を頑張ってます。

「ママはムッターって言ってますって」

「あら、そうなの？じゃあパパは？」

「フアーター！」

まずはいきなり言葉に興味を持ち始めました設定開始。

や、まずは言語に興味を持って、同盟公用語どころか帝国公用語は通過点に過ぎず、日本語まで習得しちゃいましたって流れを作ろうかと思つて。

帝国公用語は、私の知ってる未来がそのまま来るとすれば必須だろうから、私も割と必死です。

やっぱ時代に乗り遅れたくないもんね？同級生の中には「敵国の言葉なんて覚えてられるか！」とか言っちゃってあんまり熱心じゃない子たちもいるけど、そういう子にも

「捕虜の人とか、何言ってるかわかんないと色々不安じゃない？悪口言っただりしても嫌だし…」

と、それとなく勉強する気になるように促してはいる。同級生たちが後々後悔するかも、と思うと寝覚めが悪いしね！

実は捕虜交換式のキルヒアイスの名ゼリフをきちんと自分で理解したいというのが今の私の野望なんです。

そのためには勉強あるのみ！という事で頑張ってるんだけど、さすが8歳、頭が柔らかいのか、覚えたい事がスルスル入っていくわ。これはなんとかなるかも知れない、と自分のことながら期待しちゃってます。

あとは図書室に通って、特に歴史モノとか物語をよく読む所から始めて、いずれその中に出てくる様々な文化についても興味を持ちましたってなる寸法。

まず第一歩として。

「ママ、私今日のお昼は『たまごごはん』がいいなあ」

「あら、またそれ？シャルロットはたまご飯が好きねえ」

「だって美味しいんだもの。私にも作れるし！」

そう、誰にも作れる「たまごごはん」を我が家の定番にしました！ニンジャが出てくる物語にちよこつと載ってて、そこからネット検索したら「昔の食べ物」として紹介していたんだよね。

それをおねだりしてママに材料を買ってきてもらって自分で作ってみたんです。

お手軽＋簡単にママもビックリ。

そのあと、『卵のリゾットよ』と平然とパパに出す姿を見て、今度

は私がびっくり。

ま、汁気から言えばリゾット…か？

パパもユリアンお兄ちゃまもヤンおじちゃまも、おかわりするくらい好評でした。

今度は何を作ろうかな？

『シャルロット・フィリス・キャゼルヌです。8歳です。好きなのは、ママとお料理すること、妹とユリアンお兄ちゃまと遊ぶ事です。嫌いなことは、運動と、お酒を飲んだパパのお世話です』

『はい、シャルロット良くできました！』

ふふふ。柔らかい8歳の頭脳と、大人ならではの効率化を知っている今の私には、帝国公用語も怖くはないわ……！！

って、まだ片言自己紹介レベルなんですけど。

なんというか、キルヒアイスのお話を自分で理解するとか無理じゃね？

もう既に同盟が捕虜にした皆さんは到着しているらしいので、キルヒアイスが来るのもそんなに遠い話じゃないと思うのよねえ。

とりあえず、今日の授業は『帝国公用語でフリートーク』なので、私は先生に直接聞いてみる事にした。

『先生、私は聞きました。もうすぐ、帝国の人が来る。それはいつ？』

…片言なのはしょうがないのよ、分かんないんだもん……！

「シャルロット、正しくはこうです」先生、私はもうすぐ帝国の人たちがここに来ると聞きました。それはいつですか？」…さ、復唱してごらんなさい」

『…先生、私はもうすぐ帝国の人たちがここに来ると聞きました。それはいつですか？』

「よろしい。」2月19日です。その日は学校はお休みです。家で国营放送を見て、後で感想を教えてくださいなね」

『分かりました』

そっかー、もう2月に入ってるから、ホントにすぐそこなんじゃない。やっぱ、この語学力じゃまだネイティブの会話を理解するのは難しいかしら、とか考えてると他の子たちも先生に質問し始めた。

『先生、帝国からはどんな人が来るんですか？』

『いけない人ですか？』

『私たちは戦いますか？』

……やけに物騒だ。

言い方は丁寧だけど、それは帝国公用語に慣れてないからで、要するに「悪いやつらが来るんですか？」「俺たちが叩きのめしてやりましょうか？」という意味に違いない。

や、あんたたちじゃ小指一本も折れないし。

先生も苦笑して、まあまあ、と両手で押さえるようなそぶりをしながら

『帝国から来る人は、戦いに来るものではありません。本当は同盟にいるべき人と、本当は帝国にいるべき人を交換して、お互いに幸せになりましようと言ってくれた人が来ます。名前はジークフリード・キルヒアイスさんです。とってもハンサムな方だそうですよ』
と話した。

『へー、帝国にいる、いいひとなんですネ』

『見てみたいです』

『私も！』

子供って単純で、先生がいい印象を話すと「いい人」、悪い印象を

話すと「悪い人」にすぐ断定してしまう。

【おーる・おあ・なっしんぐ】の精神よね。

今現在私のクラスのキルヒアイス評価はウナギ登りだ。

「いいですか、みなさん。先生は一言も『いいひと』とは言っていないですよ」

先生は伝わらないと感じたのか、同盟公用語で話した。

「今回、キルヒアイスさんが私たちにとっても嬉しい行動を起こしてくれたのは、その行動をとる事で帝国側にも嬉しい事が起こるからです。」

決して全て同盟のためを思っでしてくれたわけではありません。

今回はどちらも嬉しい結果に繋がったわけけれども、今度出会う時はそうではないでしょう。

同盟と帝国の間には戦争を続けなければならない大きな理由があつて、それはまだ解決していませんから。

私たちにとって帝国の人は、「いい人」と言いきることはできない人たちです。

みなさん、何か一つの事で軽々しく人を「いい人、悪い人」と判断してはいけません。

でも、帝国の人だって、「自分たちにとっても嬉しい事」なら今回のように「私たちにとって嬉しい事」をしてくれる人がいて、キルヒアイスさんはその一人です。

帝国の人たちを、軽々しく「いい人、悪い人」と判断してはいけなけれど、だからと言ってどちらか一方に決めつけることはしないで、自分の目で見て、良く考えてから判断しましょうね」

「……はーい……」

8歳児にはちょっと難しいのか、クラスメートはあまり理解できなかったような顔をしながら返事を返した。

しかし先生、やけに良識的な事を言う。

やっぱ、ヤンおじちゃま率いるイレギュラーズが跋扈するこのイゼルローンだと、リベラルな発想の人が多く集まりやすくなるのかしら。

『先生、私たちはキルヒアイスさんに会えますか？』

ハンサム、と聞いたからか、ちょっとおませさんな女の子がそう質問してきた。

『いいえ、たぶんあなた方は会う事ができません。テレビで見るとよいでしょう』

『でも、不満です。テレビは早い。話すのが。聞こえない』

「メイリン、『聞こえない』ではなく『聞き取れない』です。『大丈夫、みなさんはもう、帝国の方とお話できるくらい上手に話せます。19日はテレビで誰がどんな話を話したか、先生に教えてくださいね』」

『帝国の方とお話できる』…？

知らないうちにそこまで語学力が進んでいたのか。

ちよつとびつくり。

転生する前だって学校で英語は習っていたけど、実際にネイティブな人と会話するほどうまくはならなかったもん。

アレか、やっぱり必死さか。

まあ、帝国公用語と同盟公用語が割と似たような形態だということも覚えやすい理由の一つではあるんだけどね。

でも、そっかー…話せるのかー…

「?」シャルロットどうしました、凄く機嫌がいいようですね?」

『はい先生、私楽しみです。凄く。19日です』

『そう。じゃあしっかり言葉を練習して、テレビをもっと楽しめるようにしないでね』

『はい!』

思わずニヤニヤしてしまったのが先生にも伝わってしまったが、まあそれは仕方がない。

今、この段階で私の目標が

「キルヒアイスの言っている事を理解する」
から、

「キルヒアイスとお話する」

に、大幅バージョンアップを果たしたんだから!

「パパ、ヤンおじちゃま、ユリアンお兄ちゃま、お願いします!」

「お願いしますと言われてもなあ……」

「うーん……」

「……………」

私が頭を下げて頼んでいるというのに、男どもは唸ってばかりで色よい返事をくれやしない。

まあ、なかなか難しいお願いをしている訳だけれども。

「今度ね、どうしてもパパの職場に行ってみたいの、学校の宿題なの、【職場体験】なの」

今のシャルロットのカワイイ容姿を活かしてウルウル上目使い作戦を決行中です。

ポイントは胸の前で手を合わせて【お願いポーズ】を作るところ。

この位の子供特有のあどけなさを醸し出すカンジで狙い撃ちたいところだ。

…可愛いだろ^{シャルロットだけでも}うな私

自分でもたまに鏡見て「外国人の女の子可愛い!」と萌えてるのは内緒の話。

傍から見たらナルシストだもんね。

「シャルロット、パパは確かに事務の仕事だけど、それでも軍人には違いないんだ。危ないから、できたら他の仕事にしなさい」

「クラスメートの中で、一緒にやってもいいよと言ってくれる子はいないのかい？」

パパとヤンおじちゃまはそう言っただけで断るつもりでいる。
で・も・ね。

「でも、クラスの子の半分以上がパパかママは軍で働いてるんだもん」

「……………ああ、なるほど」

2人とも甘いのよ。

ここはイゼルローン【要塞】で、軍の施設で、そりゃこんだけ大きいから商店だってあるし町一個分の人数以上の人間が余裕で暮らせるほど人はいるけどさ。

それでも大部分は軍の関係者よ。

しかも、

「リユークんのパパはローゼンリッターだし、セイラちゃんのパパはちょうどほう部なんだって。カンナちゃんのママはパパと同じ所だし……」

大抵パパよりもっと危険な部署か、当然行っちゃいけない部署か、パパと同じならパパの部下で、

要するに軍内で職場体験をするなら一番無難なのはパパの所なんだよね。

「シャルロット、他の職場に誰かと一緒に行くのでは駄目なの？シャルロットはケーキ屋さんとか、大好きじゃないか」

なんとなく困っていきそうなパパとヤンおじちやまを見かねて、ユリアンお兄ちゃんも助け船を出してきたけど、私は今日は乗るつもりはない。

「ケーキ屋さんは、セイラちゃんとリユーくんが行きなさいって先生が言ってたの。それに、カンナちゃんはママの職場に行くんですって！カンナちゃんのママはパパと同じ所なんだから、シャルロットだって行きたいの」

そう。私は今回は何としても【同盟軍】に入り込みたかった。やーほら、もうすぐキルヒアイス来るしね？なんとか繋ぎを作っときたいじゃないですか。

「シャルロット、パパの職場は確かにカンナちゃんのママと同じ所だ。だが、パパの仕事は軍人以外には見せられない書類がカンナちゃんのママより沢山ある。シャルロットがもし来ても、多分つまらないし、がっかりすると思うよ。できれば違う所にしなさい」

「…でも」

「そうだ、ママの仕事はどうだ？シャルロットは将来ユリアンのお嫁さんになるんだから、ママの仕事をしっかり体験してみるのもきつと勉強になるぞ。シャルロットが夕飯を作ってくれたりしたら、パパは嬉しい」

「ママの仕事は知ってるもん！！」

「ママのお仕事は知ってるもん！きちんとはできないけど、少しずつ手伝ってるもん、毎日見れるもん！でも、シャルロットはパパのお仕事は見たことないよ？」

パパはいつも、どんなお顔でお仕事してるの？
パパはいつも、職場でどんなお話をしてるの？

パパのお仕事のお友達はどんな人なの？

パパはどんなお仕事は好きで、どんなお仕事はキライなの？

ママのお仕事は見てたけど、パパのお仕事は知らないもん…」

シャルロットは、無知だ。

こんな戦争の最前線の要塞にしながら、それでも軍の、戦争の情報は必要最低限しか与えられないし、なるたけ危険なところから遠ざけられて【守られて】いる。

ま、ありがたいっちゃありがたいんだけど、私は一応中身オトナでしたから、シャルロットをそんな【金庫入り娘】にするつもりは毛頭ないのよ。

危険すぎる事はゴメンだけど、自分が危険なところにいて、守られているんだって言う事を忘れない程度には確認することはやぶさかでないんです。

だから今日は引かないつもり。

……ま、妥協点は用意してあるんだけどね。

「……………」

「…うーん、困ったねえ」

黙ってしまったパパと、うつむいたまま動かない私をみて、ヤンおじちゃまはガシガシと頭を掻いた。

「シャルロットが言っている事も、分からないではない…。先輩、提案があるんですが」

「…なんだ」

「シャルロットの職場体験、ユリアンにお願いしたらどうでしょう。」

彼が今やっている事といえば、そんなに危険な事ではないですし、その日はメッセンジャーを中心に動いてもらうことにして先輩の所に行ったり【先輩のお友達】の所に行けばいいじゃないですか」

「しかしだな……」

渋っているパパに、まだうつむいている私。ユリアンお兄ちゃまは少しオロオロしていて口を挟めない。

そんな中、キッチンからお茶とクッキーを持ってきながらママがついでのようにポロッと言った。

「あら、ヤンさんがこう言っているんだからそれでいいじゃないですか」

「オルタンス！」

「あなた何をグズグズしているんです、せっかくヤンさんが良い案を提供してくださったんですよ、それでいいじゃないですか」

「しかしだな、俺はもし戦闘に入ったりした場合の事を考えて……」

「まあ！あちらから言ってきた捕虜交換が行われるはずのこの時期に、イゼルローンを直接攻撃なんてそれこそ帝国が恥知らずでない限りあり得ないってことくらい、素人の私にだって分かりますよ。」

それに……ねえユリアン」

「っ、はい！」

「もし職場体験中に戦闘態勢に入ったら、シャルロットを家まで届けてくれるわよね？ヤン提督も、それでいいですわよね？」

「はい！」

「もちろんです、キャゼル又夫人」

ほら、何か問題でもありますか？と続けるママに、パパはぐうの音も出ない。

「っ、勝手にしろ……」

「そうさせてもらいますとも。…ほらシャルロット、あなたも顔をあげなさい。いつまでしょげているの」

ママに肩を押されて、私はおずおずと顔を上げる。

「…パパ」

ほんとにいいの、小さな声でたずねると、パパは「気をつけるんだぞ」

とまだ少しすねた声でそう、答えた……………。

勝ったね！！

実は本命は【ユリアンお兄ちゃまの職場体験】でしたー！！
いやさ、だってさ、パパの職場無理。私一日中椅子に座ってられそうもないし。

多分あの人自分の部屋からあんまり動かないと思うんだよね。
マジな話極秘文章とかも多いだろうし、実は最初から狙ってませんでした。

でも、最初から【ユリアンお兄ちゃまの職場体験】をお願いしても

やっぱりひと悶着あると思うのよねえ、パパ、あんまりシャルロットを戦争と関わらせたくないみたいだし。

そこで！一計を案じた私はまず無理そうな事を要求して、相手の出方を見ながら自分の本命を勝ち取るという取引のワザを使おうとしていたんだけど…。

ママが援護射撃してくれるとは思わなかったわ。

かなり助かりましたー。やー良かった良かった大成功！

嬉しくて思わずニコニコしながら

「ありがとう！パパ、ママ、ヤンおじちゃん、ユリアンお兄ちゃん！」

と言った。やっぱりお礼は基本でしょ。

「良かったね、シャルロット。頑張ろうね」

「はい、ユリアンお兄ちゃん。よろしくお願いします！」

「おはようございます、よろしく願いします、ユリアンお兄さま」

「おはようシャルロット。今日1日頑張ろうね」

私は早速、課題消化のために職場体験をすることになった。

てか、ぶっちゃけ捕虜交換式が近すぎて、そのあとはユリアンお兄さまもヤンおじさまもハイネセンへ旅立つので、かなり無理をして調節してくれた、らしい。

子供の私には裏事情は話してくれないんだけどね。

ともあれ、ユリアンお兄さまは朝早く我が家に寄って、私を回収してくれたあとヤンおじさまのオフィスに出勤することにした。くれたので、私はやっぱり何にも準備する事はなかった。

いるのはペンとメモ用紙、お昼用のお金（食堂で食べるらしい）と女の子だからティッシュとハンカチかな、とヤンおじさまは呑気に言っていたけど、私はそれに一応カメラをプラスしておいた。許可が降りたら撮影してレポートにまとめないと、見栄えも悪いだろうしね。

「おねえさま、いつてらっしゃい」

「ユリアンにあまり無理を言わないようにね」

「はい。いつてきます！」

妹とママに見送られながら、ユリアンお兄さまと歩きだす。

「お兄さま、今日は何のお仕事をするの？」

「うーん、ヤン提督は『主にメッセンジャーをしたらいい』と言っていたから、色んな書類を持って誰かのオフィスに行くのが主な仕

事になるかなあ。あとは、ヤン提督が仕事をしやすいように周りの環境を整えるのが、僕の主な仕事なんだよ」

「周りの環境を整える？」

「ちよつと口寂しくなった時にすぐ紅茶を入れたりとか、頭の動きを鈍らせないように甘いものを用意しておくとか、書類をなくさないように整理整頓しておくとか、だね」

「うゝ… はい、書けました」

歩きながらだけど、結構いろいろな情報があつたのでメモを取るのも一苦労だ。そんな様子の私を見て、「なんだか新聞記者みたいだね」とお兄ちゃまは笑った。

「じゃ、今日はムライ少将とキャゼルヌ少将にこの書類を届けてくれないか」

「はい、わかりました」

「はい、わかりました！」

ユリアンお兄ちゃまに続いて元気よく返事する私に、ヤンおじちゃまとフレデリカお姉ちゃまはニコニコと笑って「頑張ってるね、シャルロット」と応援してくれる。

頑張りますよゝ、やる気マンマンだもん！！

「行く前に何か質問はあるかい、シャルロット」

ヤンおじちゃまも気をきかせてこんな事を言ってくれたので、私はかねてからの疑問を消化することにした。

「あのね、何で端末でメールができるのに、メッセージャーが必要なの…ですか？」

これ、割とわかんなかったんだよね。メールで済ませりゃいいじゃんって常々思ってたのよ。

ヤンおじちゃまは「いい質問だ」と言っってこう説明してくれた。

「メールは確かに便利だね。いつでも好きな時にチェックできる。でもそこが一長一短で、…あつまり弱点もあるんだ。返事が欲しい時間までに相手がメールをチャックしてくれていなかったら、困るだろう？だから、返事がきちんと欲しくて、人を介しても大丈夫な場合はメッセンジャーを使っただよ」

なるほど。

ま、機械だとハッキングの心配とかもあるんだろうけど、大まかにはその理由があるのね。

確かにシェーンコップおじちゃまとかポプランとか、メールチャットくしなさそうだもんなあ…。

メモを取りながらそんな事を思う。

「こんなんでいいかな？」

「…はい、ありがとうございます」

ヤンおじちゃまにお礼を言っていると「そろそろ行こうか」とユリアンお兄ちゃまが声を掛けてくれたので、早速出かけることにする。

「行つてきます」と手を振りながら挨拶したら、フレデリカおねえちゃまもニコニコしながら手を振り返してくれたし、ヤンおじちゃまは片手をあげて「気をつけるんだぞ」と送りだしてくれた。

「じゃ、まずはムライ少将の所に行こうか」

「はい。…ムライおじちゃまはどこにいるの？」

「この時間ならご自分のオフィスだと思うよ」

ユリアンお兄ちゃまはなんとはなしにそう答えてくれたけど、

「ユリアンお兄ちゃま、すごい！」

と、感心してしまった。

「え？何が？」

「だって誰がどこにいるのか、大体わかってるんでしょ？すごいね」

「ああ……うん、それが僕の仕事だから、かな」

当たり前のことだよ、とユリアンお兄ちゃまはさらりと言ったけど、ねえ。

だいたいお兄ちゃまはまだ中学生なのよね、日本で言えば。あれ高1だっけ？

ともかく、そんな若さで秘書めいた仕事をこなせるのはやっぱり凄いと思うのよ。

うーん、読者として読んでいた時にも『できた子供』だなあと思っ
ていたけど、こうして一緒に過ごしてみると一段とユリアンお兄ち
やまの『できた子供っぷり』を思い知らされるというか。

私中身20代なのに、シャルロットが14、5歳になってもこんな
風に立ち回る自信、ないわー…

とか、感心したり落ち込んだりしながらムライのおじちゃまのオフ
イスに辿り着いてしまった。

「失礼します」

「失礼します」

軍の作法なんてわからないから、大抵の事はユリアンお兄ちゃまの
言動を真似ている。

「入りました」

ムライのおじちゃまは独特のかたい声と口調で許可を出した。

うーん、緊張する。

「ヤン提督から書類を預かってまいりました」

「うむ、こちらへ寄こしてくれたまえ」

ユリアンお兄ちゃまも、いつもより気を使った話し方で対応している。

ムライのおじちゃまは、ＴＰＯにはうるさいんだよね。

ごくたまに家にご飯を食べに来る事があるんだけど、その時も若干寛いではいるけど最低限の節度は保っているように見えるし。

まあ、私は割と甘やかされている気はするんだけど。

「書類は確かに受け取った。ヤン提督にはあとで私の方から直接お返事いたしますとお伝えしてくれ」

「承りました」

「うむ。……ところで、シャルロット君は、今日が職場体験なのだね？」

「はい、ユリアンお兄ちゃまについて、お兄ちゃまのお仕事を体験させていただいています。…ムライのおじちゃまも、ごきょうりょうくありがとうございます」

いきなり水を向けられて驚いたけれど、無難な返事をしたつもりだった。

でも、おじちゃまは少し間をおいて「シャルロット君、一つだけ注意をしておくが」と切り出した。

「今日は職場体験で、君はいわゆる『軍人の生活』を体験している。普段はもちろん、軍人の慣習にとらわれる必要はない。けれども今日は君は『軍人と同じ行動』をしなければいけない、そうだね？」

「…はい、そうです」

「うん、君も、いつもは使わない敬語を使っていたり、それなりに気を使って頑張っていると思う。けれど軍人にはもう一つ大切な事があるんだよ。…いつもの呼び方ではいけないね」

「呼び方、ですか」

「そう、呼び方だ。例えば私の事は『ムライ少将』と呼ぶのが正し

い」

「ムライ少将…」

「そう、少なくとも職場体験の間はそうしたまえ。公私の区別をつけるのが、正しい職業人のあり方だと私は思うのでね。…そうだな、例えば君のお父上のキャゼル又少将とヤン提督なんかもそうだろう。ヤン提督は普段、キャゼル又少将の事を『先輩』と呼ぶが、仕事の時は『少将』と呼称を変えている。…気づいたかね？」

「そういうばそうだ、今日もヤンおじちゃまは「キャゼル又少将」と呼んでいたと思いだし、私はこくんとうなずいた。

「わかりました。ご助言ありがとうございます、ムライ少将」
「うむ」

満足そうに頷くムライ少将を見てから、ユリアンお兄ちゃまも「ありがとうございます、それでは失礼します」と敬礼し、私を連れて退室した。

「偉かったね、シャルロット」

「ムライ少将のはなし、少し難しかったろう？」とユリアンお兄ちゃまが心配そうに声をかけてくれたけど、

「ううん、大丈夫ちゃんとわかったの」

と、私はにっこり笑って返した。

「みんな、お家に来てご飯食べてる時と職場では、やっぱり違っていてことがわかったの。ムライのおじちゃま…ムライ少将に教えてもらって良かった。パパの所に行って、『キャゼル又少将』って言うたら、きつとパパビックリするね！」

「なんだか楽しみ、と続けるとユリアンお兄ちゃまも笑って「そうだね、どんな顔するんだろう」と言ってくれる。」

…てか、ユリアンお兄ちゃまはなんて呼べばいいんですか？ムライ

少将……！！

「あ、シャルロット、ちょっとここ見ていこうか」

移動の最中、ユリアンお兄ちゃまはそう言って私を港へ誘った。

「この頃は一日に一度はこうして港に来ているんだよ。外回りから帰ると、なんとなく提督も港の様子を気になさっている事が多いしね」

それに僕も気になっているんだ、野次馬根性って凄いよねなんて言いながら、出入りしている船を眺めている。

そんな時背後から

「よー、ユリアン。デートか？」

と、どこか呑気で陽気な声がかかった。

「ポプラン少佐！」

お兄ちゃまは振り向いて敬礼した後、「違いますよ」と返す。

「今日はシャルロットの職場訓練で、今はメッセンジャーの仕事をしている最中にちよつと寄り道してたんです。…ポプラン少佐こそ、どうしてここへ？」

「あー、こんな時は俺たちの出番なんてそうそうないからな。入港してきた船の中に俺の彼女になる予定の女がいるかもしれないから出迎えに来たんだ」

「……………ああ、なるほど」

ユリアンお兄ちゃまは流石にまだまだポプランの扱いに慣れてないと見えてなんとなくしどろもどろだ。

やっぱり、まだまだ子供なんだなあとかボーっと考えていると

「しかし流石にキャゼル又家のシャルロット嬢じゃあ、ちよつと守備範囲外かな？いや、差別する気は全くないが、いかんせん俺にもいくら可愛くても少女を愛でる趣味はないんでね」

と、軽口をたたいた後

「こんにちは、シャルロット」
と挨拶してきた。

「こんにちは、ポプラン少佐」

さつき習ったばかりの『軍人らしいあいさつ』をすると、ポプランは（うん？）と不思議そうに片方の眉毛を挙げる。

「ああ、さつきムライ少将の所へ訪室した時に、『公私の区別は付けること』と教えていただいたばかりなんですよ。…ね、シャルロット」

「はい！」

元気よく返事をしたら、ポプラン少佐はまるで苦虫を噛み潰したような顔をして「あの生きた化石に…」とつぶやいた。

「そりゃ災難だったなシャルロット。あの生きた化石と書いてムライ少将と読むべき御仁は、正しい事を言うが正しい事しか言わない。そんなの遊びたい盛りの子供にとっちゃ葬式に参加するくらいつまらないだろう？わかる、わかるぞその気もち。なんたって俺は永遠の青少年だからな！」

「ポプラン少佐………教育上良くないですよ…」

なんかユリアンお兄ちゃま疲れてる。

まあ確かにポプランは子供の教育上良くないわよね。面白いけど。良かったー私、中身大人で。なんかこの中に囲まれてたらどんな子供が出来上がるのかちょっと末恐ろしいわね…。

ユリアンお兄ちゃまみたく聞きわけのいい子ならいいけど、なんとなく色んな人の悪影響だけモロに受けるとんでもない変人に成長しそうだし。

なんて失礼な事を考えつつ、私は割と重要な『ある質問』をすることにした。

「ポプラン少佐は、普段のときは『ポプランお兄ちゃま』でいいの

…ですか？」

「うん？なんだシャルロット」

「えと、今は『ポプラン少佐』だけど、普段はどう呼べばいいのかわかって。『ポプランお兄ちゃま』でいいですか？」

そう。ポプランはまだちゃんと呼び方考えた事がないのだ。

家に遊びに来た事がないわけじゃないけど、今みたく割と下世話な話も悪気なく盛り込む人だから、なんとなく周囲がシャルロットや妹から遠ざけているのよね。

てなわけで本人に直接確認。

ポプランはシェーンコップおじちゃまと似ているのかわかって思ってたけど、意外とシャルロットに対してはきちんと対応してくれてるのではじめから「お兄ちゃま」呼びだ。
ま、ヤンおじちゃまより年下だしね！

「ああ、『ポプランお兄ちゃま』ねえ。いいな、どこか倒錯的で！
うん、今も『お兄ちゃま』でいいぞ」

と、ポプランお兄ちゃまはそれで良いとのことだから、これからはポプランお兄ちゃまに統一で決まり。

しかし。

「はい、じゃあ普段は『ポプランお兄ちゃま』にします。…でも、いまは『ポプラン少佐』です」

と、断りを入れておく。案の定ポプランお兄ちゃまからは

「俺は別に気にしないぞ？俺がパイロットでなかった事なんて一瞬たりともないからな。俺はいつでもかっこよくて、強くて優しいエースパイロットさ！」

なんて返ってきたけど、フルフルと首を横に振った。

「ううん。違うの、私が間違えちゃうの。ムライ少将の言ってるこ

と、すごくよくわかったから。お家に来てる時と、お仕事してる時と、みんな少し違うから、それを私が忘れちゃいけないの。ポプラン少佐は呼び方が同じでも混乱しないのかもしれないけど、私がこんがらがっちゃうから」

だからポプラン少佐でいいですか、というと、ポプランお兄ちゃまはニヤリと笑った。

「ふーん…。なるほど。――イイ子だシャルロット、その年で自分の意見をキツチリ言えるなんてそうそうできることじゃない。お兄ちゃまがご褒美をあげよう」

と、手渡ししてきたのはチョコレートボンボンだった。

「少佐、シャルロットにはまだ無理ですよ…」

中身お酒じゃないですか、とユリアンお兄ちゃまは言ったけど、ポプランお兄ちゃまはどこ吹く風だ。

「そうか？外側だけ舐めればいいじゃないか。――いいかシャルロット、俺が酒をおごりたくなるくらいイイ女になるんだぞ」

そう言っただけでガシガシと頭を撫で回した後、満足したのか「じゃあな――」と自己完結して去っていつてしまった。

「なんだったんだ…」

ユリアンお兄ちゃまがぼつんと言っただけで笑えた。

「ねえ、ユリアンお兄ちゃま」

「うん？なんだいシャルロット」

チョコレートボンボンを手渡しながら（どう考えたって私じゃ持て余すもの）、私はユリアンお兄ちゃまにさっきから気になっていた事を聞いてみる。

「ユリアンお兄ちゃまはなんて呼べばいいの、ですか？みんなが『ユリアンくん』だったり『ユリアン』だったりするから、よく分か

らないの」

すると、ユリアンお兄ちゃまは（ああ、なるほど）という顔をした後、ちよつと考えてこう言った。

「僕は兵長待遇なんだけど、一番下っ端だから確かに職位で呼ばれる事なんて殆どないんだよね。んゝ、分かんないな。多分、「ミンツ兵長」とかなのかもしれないけど、大体軍属でもないわけだし。

……シャルロットが気にならないなら、僕だけはいつもの通りに『ユリアンお兄ちゃま』の方がありがたいんだけど、シャルロットはどう思う？」

確かに、職位が下過ぎて呼び捨てだったりする事が多いのは納得できる。

そんな人の周りでわざわざ「ミンツ兵長」とか呼ばれるのは恥ずかしいかもね。佐官とかになればまだいいのかもしれないけど。

「分かりました。お兄ちゃまだけはお兄ちゃまにします」

「うん、そうしてくれると助かるよ」

そんなやり取りをしながら歩きはじめていたんだけど、途中でまたユリアンお兄ちゃまが足を止めて

「シャルロット、あれを見てごらん」

と、壁の隅に書かれた落書きを指差した。

「……えつと……『くたばってしまえ、ホルト中尉、いずれ背中から撃たれておだぶつだ、大神オーディンはお前の罪をご存じだぞ……』」
帝国の軍人さんが書いたのかしら」

「うん、そうだよ。帝国では家具職人をしてたんだけど、戦争で捕虜になっちゃってね。でも、今回の捕虜交換式で家に帰れるって喜んでたんだ」

「へえ！お兄ちゃまはこの落書きの人に会ったのね！」

「うん、偶然なんだけどね」

と、お兄ちゃまは簡単に、ここであつた帝国軍の軍人さんとの話を話してくれた。

「僕と同じくらいの息子さんがいる人でね、僕が『できるなら軍人にしないでくださいね』と言ったら、『うん、うちの息子とお前さんが戦場で殺しあつたりするのは、いい気分じゃないな』て返事してくれたんだ」

と、少し嬉しそうに話し、

「ねえシャルロット、僕は軍人で、戦いに出たら勝利を勝ち取らなきゃいけないのは当然の話だ。でも、当たり前だけど帝国軍の人一人ひとりにも、娘さんや息子さん、奥さんとか家族がいて、それぞれに大切な生活があるんだなあって、僕はこの人に会って改めてそう感じたんだよ。ぼくらは戦わなきゃいけないんだろうけど、そういう事を心の片隅でいつも覚えていた上でじゃないといけないのかなあと、この頃は思ふんだ」

「…そうね、お兄ちゃま。シャルロットも忘れないね」

「うん、覚えていてくれればうれしいな」

どうやら、お兄ちゃまはこの落書きを私に見せたかつたらしい。一通り話して満足したみたいで、「そろそろ行こうか」と歩みを速めた。

私はもう一度、落書きを振り返ってから、お兄ちゃまのあとを追った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1530v/>

銀河の歴史は何ページだったっけ？（仮）

2011年8月21日10時33分発行